イエスの聖テレサ（アヴィラの聖テレジア）の『自叙伝』

現在、世界の跣足カルメル修道会では、2015 年のイエスの聖テレサ（アヴィラの聖テレジア）生誕５００年祭に向けての準備に入っています。今年の１月から３月にかけての『カルメルの小窓』では、聖テレサの年表を提示しました。これから、彼女の作品を簡単に紹介します。

この作品は、1565 年に完成し、当時の霊的指導者であったドミニコ会士のガルシア・デ・ドレド師宛に報告しました。この作品はもともと「自叙伝」というタイトルはなく、テレサが霊的指導者に当てた霊的報告の部類に入るものです。この作品に至るまで、テレサはいくつかの報告書を書いています。一つは回心の神秘体験をした後、イエズス会のディエゴ・デ・セティナ師への念祷生活の報告であり（自叙伝 23：15 参照)、もう一つは、1560 年の時の指導司祭ドミニコ会士イバニエス師の勧めに従って報告集を書いています。この報告集は 1561 年から書き始めて、1562 年 6 月に書き終わり、当時、テレサがトレドに滞在中、知り合った新しい指導司祭ガルシア・デ・トレド師に渡しています。これが第一の編集と言われています。しかし、現在に至ってこの作品は存在しません。

1564 年に著名な異端審問官でもあったフランシスコ・デ・ソト・サラサール師と面会し、この報告集を再編集することをすすめられ、当時、有名な霊的指導者でもあったアヴィラのヨハネ司祭（現在、ベネディクト１６世教皇によって教会博士の手続きに入っている）にも見てもらうように促されます。結局、1565 年に 40 章からなる報告集が完成します。３年後にこの作品がアヴィラのヨハネ司祭（フアン・デ・アヴィラ）に届き、彼の保証の返事の手紙を聖女が受け取ります（1568 年)。しかし、聖なる司祭からいくつかの表現の見直しとある文の展開も勧められ、ドミニコ会士のバニェス師からも同様に勧められていましたが、もうすでにコピーが増殖してしまっていました。

1575 年にエボリ王女によりこの本が異端審問所に告発されます。これにより、このオリジナルの作品が異端審問所の中に監禁されることになります。この時以来、聖女が亡くなるまで、このオリジナルの監禁が解かれることがありませんでした。この作品が異端審問所から解き放たれて公に発行されるのが、1588 年サラマンカのアウグスチノ会士、ルイス・デ・レオン師の署名によります。タイトルは「イエスのテレサ院長の生活と神が彼女に与えた恵みについて：この作品は彼女の聴罪司祭の指示に従って書かれた」となっています。フィリペ二世国王が早速購入しエスコリアル図書館の蔵書にします。

＜以上は、PÉREZ Joseph, *Teresa de Ávila y la España de su tiempo*, Madrid 2007.を参考にした。＞

次に、『自叙伝』の構成を 2009 年にローマ本部から出されましたガイドに基づいて紹介します。

第Ⅰ部　　最初の部分は、第１章から第９章にわたっています。聖テレサは自分の四十年にわたる人生の自伝的な事柄を報告します。つまり、幼年時代から彼女の神秘体験による回心まで。この物語の初めから９章まで、聖テレサは自分を二分しているようです：つまり、語り始める自分と（何かから）語られる自分とに。語り始める自分は書かなければならない要点を語り始めます。一方、語られる自分は（何かから）語られる出来事を前にしたとき、彼女が持っていた視点からそれを描写します。このような報告の中で読者を惹きつける何かがあります。それで読者は彼女の回心のエピソードに直接巻き込まれている自分にはっきりと気づくのです。テレサは、自分の人生における鍵となる出来事としてそれを語っています。

第Ⅱ部　　第 10 章は第Ⅱ部への移行部になります。第 11 章から 22 章で、著者は比喩的なイメージを用いて、祈りの四つの段階について詳細に解説します：つまり、庭の潅水（水撒き）の四通りの仕方のイメージです。それは、黙想の念祷（11-13 章）、注賦的・静穏の念祷（14-15 章）、感覚の停止（眠り）の念祷（16-17 章）、一致の念祷（18-21 章）についてです。22 章は、“私たちにとってあらゆる善の源である”（22：7）イエス・キリストを眺めながら霊的な旅をし、それを要約し飾るものです。この部分は、彼女が神秘体験後に体験している新しい生活を、より良く理解することを私たちに準備させます。

第Ⅲ部　　ここは 23 章から 31 章までで、著者は、生涯の物語に戻ります。けれども、もはや第Ⅰ部とは違います。第Ⅰ部で述べました語り手と語られる人物との距離はほとんどなくなり、両者は自己同一性の変化の中に溶け込みます。これは、聖パウロの表現や体験に似たもので、23 章の最初から語られています。“いまこそ新しい書物が、つまり、新しい生活が始まります。私がはじめにお話したのは私の生活でした。次に念祷の種々の状態について始めたところは、私における神のご生活です”（23：1）。

第Ⅳ部　　第４の部分は、32 章から 36 章までです。そこにおいて、彼女はア

ヴィラのサン・ホセ修道院の創立の外的出来事を語るために、自分の生涯の物語から離れます。けれども、著者自身によれば、その出来事や報告は、31 章まで語られた実りであり、彼女の神秘体験の実りと結果でもあります。その神秘体験は、他者のための生活の源泉への回心でした。彼女の個人的な救いの歴史は、（人類の）救いの歴史の中へと巻き込まれることになり、テレサは、最初の弟子たちのグループと共に、サン・ホセ修道院で、キリストとその教会に奉仕することに着手し始めました。彼女の受けた恵みは、こうして、彼女個人の利益のための特別な特典としてではなく、全ての人の益のための教会の賜物として現れるのです。

第Ⅴ部　　この部分は、第 37 章から 40 章までで、自叙伝の最後の章を仕上げます。ここにおいて、トレドのガルシア師の勧めを受けたテレサは、彼女のその時生きていた体験から、第Ⅲ部の続きを完成するために自伝的スタイルを再開します。以前の恐れと困惑とは対照的に、ここでは確かな信念をもって、新しい体験を綴る落ち着きと内的確信を打ち明けています。

2009 年 10 月 15 日から 2010 年 10 月 15 日まで、テレサ生誕 500 年祭の準備として、全跣足カルメル修道会で『自叙伝』を読み深める期間でした。この学術大会が 2010 年の夏にスペインのアヴィラで開かれ、次の部門で講演がありました。

１．この作品に関係する資料の報告
２．言語的解析とテレサの自伝分析
３．テレサの信仰体験から生まれる教えについて
４．この作品における各視点からの教え
５．この作品の現代への語りかけ

現代になって、心理学、民俗学、歴史学などの多くの視点からこの作品が研究されていますが、カトリック信仰の視点から見て、「神の慈しみの書」としてのテレサの報告は、現代の日本人にとっても大きなメッセージを残していると考えられます。テレサ自身が晩年にこの書物を「神の慈しみについて」と付けて一人の学者に手紙を送っています（1581 年 11 月 9 日付の手紙）。公にタイトルを付けることはありませんでしたが、彼女の人生に偉大な神の慈しみが綴られていることは確かなことですし、彼女自身が「神の慈しみ」の愛の中で神秘的に変容した（回心した）報告が書かれています。これこそ「神の慈しみの体

験」の報告です。

　この作品から理解できることは、偉大な神様の私たちに対する「慈しみ」です。私たちの生活の中で、この「神の慈しみ」を発見できる書物として読むことが出来ます。

文責　　松田浩一　神父　カルメル会士